

もうこれで皆渡つてしまつたのね。さ又前の様に行列を作りませう。お父さん鼠はお餅を持つて先頭よ、其の次は馬鈴薯を持つた一郎ちゃん鼠でしたね、其の次がビスケットを持つた二郎ちゃん鼠、そして石鹼を持つた三郎ちゃん鼠、一番おしまひがお人蔭の頭を持つたお母さん鼠でしたね。さ、歩き出しましたよ。もうソーツト歩かなくなつて良いの。此處にはもうお猫さんは居ないんですもの。皆元氣で歩きました。そしてほらさつき節穴を猫さんご間違へた事や、蜘蛛さんに叱られた事や、お家ごお家の間を飛び越して來た時の事を色々話し合つたり笑つたりしながら新しいお家へお引越して行きました。

おしまひ

二等 逃げない小鳥

佐藤 久子

もうすぐ冬になります。

山では木の葉が紅くなつて、つめたい風が、遠い北の方から吹いて來ました。

高い木の上で小鳥のお母さんご子供が、

「もうそろ／＼暖かいお家を見つけないではならないね」

ごお話をしてゐました。

たべるものもあまりみつかりません。お母さんが小さい小鳥に云ひました。

「今頃になるぞ、村の子供が鳥籠を持つて、お前のやうに小さい可愛い、鳥をみつげに來るか
らね、食べものを見つげるさきも、よほご氣をつけないさいけないよ」

子供の鳥は「うん／＼」ごお返事をしながら、早く飛びたくて飛びたくてたまらないやうに羽

根をピク／＼動かしました。

「おかあさん、もういゝでせう。行つてもいゝでせう」

小鳥は元氣にさび立ちました。

秋の空は海のやうに青くて、さこまでも、さこまでもつゞいてゐます。

村から、子供達が鳥籠を下げて山へさやつて來ました。

鳥籠の中には、されにも一羽づゝ鳥が入つてゐました。イスカやヒワやムクドリでした。

子供達は左手に鳥籠を、右手に、もち竿を持つてゐます。

與四郎はヒワをおさりに持つてゐました。

高い木の下へ來るさ、籠を枝に下げて、持つてゐたもち竿を側に立てかけるさ、そつさ竹やぶの中に入つて行きました。

籠の中の鳥がピピピピピピなきはじめるさ、きつささこからか小鳥達がよつて來るのです。

他の子供達は小鳥がかゝる頃まで、山へ登つてあそんでゐるのですけれど、與四郎はいつも離れてじつさ様子をみてゐるのです。

ほら、もう小鳥が來ました。さつきの小鳥です。小鳥はすいぶん飛びまはつて、すつかりくたびれました。ふさ下をみるさ、

「おや？　おかあさんだ」

籠の中にあるのはたしかにお母さんのやうに思はれました。小鳥はびつくりして、お母さん島のさころへいかうさ、そばの一番近い細い枝の先にさまりました。

あら、さうしたのでせう。枝の先のベシベシしたものに足がくつゝいて離れなくなりました。枝さおもつたのは、もち竿でした。あわてゝ「バタ／＼」もがくさ、足は一層枝の先にくつゝきました。羽根もすつかりくつゝいて動かすこが出來なくなりました。

するさ、竹やぶの中からさつきの子供がさび出して來ました。與四郎でした。

「やあ、ヒワがかゝつた。うまいぞ、僕が一番だ」

與四郎は、もち竿から小鳥をはなして、そばの鳥籠の中へ入れました。中に入つてゐるのは、お母さんではありませんでしたけれど、小鳥とおんなじヒワの子供でした。小鳥は急に悲しくなつて、

「おかあさん、おかあさん」

こなきました。でも、お母さん鳥はごうしたのか助けに来てくれません。

與四郎は籠を下げて山を下りて行きました。

「おとうさん、僕、もう取つたよ、ヒワだ。可愛い、ヒワだよ」

與四郎さんが嬉しそうに云ひます。爐端に坐つてゐたお父さんが、

「さうか、それちや明日は、町へ行つて皆一緒に賣つて來よう」

と云ひました。與四郎はしばらく考へてゐましたが、

「ねえ……おとうさん、このヒワねえ、僕に頂戴よ、これ一羽でいゝから」

「なんだ、おまへのもんだ、いゝやうにしろ」

とお父さんが云ふと、與四郎はごび上つて喜びました。

そして早速別の籠へ移して餌と水を入れると、勉強部屋にしてゐる納屋の方へ持つていきました。

「毎日々々鳥取りしてるのに、あんなヒワぐらゐるに喜んで……おかしなやつだ」

とお父さんが、圍爐裏のそばから與四郎の後姿をみてゐました。

與四郎は毎日學校から歸ると、すぐに山へ鳥取りに出かけるのですけれど、さんないゝ鳥が取れても、あのヒワを賣つてしまふことは出来ませんでした。

ヒワの黄色い羽根は與四郎がさはるゝやはらかくて、小さいからだが暖かいやうに思はれました。そしてヒワのまるい黒い目が、やさしそうに與四郎を見てゐるやうでした。

きつミ喜びますよ」

お母さんは、「え、く」ミお返事をしました。でも與四郎さんが歸つて来るまでは、小鳥の籠へ入るこゝが出来ません。

その時、與四郎さんの元氣な聲が聞えました。

「コトリヨ、コトリ、カワイイヒワヨ」

「あ、よしろうさんだ」

與四郎が籠の方をみるミ、籠の上にもう一羽のヒワがミまつてゐます。

「おや、ヒワだ」

籠のヒワミそのヒワが、「ビイビイ」ミ聲を合せて鳴きました

「あ、ヒワのおかあさんだ」

與四郎はびつくりしました。

その時、すぐに思ひました。

「さうだ、はなしてやらう。おかあさんのそばへやらう」

與四郎は籠の戸をあけました。小鳥を逃がしてやらうミ思つたのです。ミころが、小鳥は逃げないばかりか、外の親鳥までが籠の中に入つて來ました。

お母さんミ小鳥は、嬉しさうに「ビイビイ」ミ頭をすりつけてゐます。

與四郎はおもはずにこゝミ笑ひながら、それをみてゐました。

ほかくミ冬の日が、小鳥たちの黄色い羽根に暖かさうに光りました。